

祭壇に奉仕すること



さる 8 月 23 日(月)奉仕者会(ほうししゃかい)の一日
 研修会(けんしゅうかい)のため、豊津と行橋の子どもたちは
 (主に小学生男子)豊津教会に集まりました。
 感謝(かんしゃ)の祭儀(さいぎ)の意味(い)と流れ(なごう)について
 学んだ後、子どもたちは感謝(かんしゃ)の祭儀(さいぎ)の間に
 使われている道具(どうぐ)について説明(せつめい)を受けまし
 た。最後に、神の御言葉(ごごんご)と祭壇(さいだん)に丁寧(ていねい)に
 奉仕(ほうし)するために、子どもたちは練習(れんしゅう)を繰り返
 しました。—その一日研修会(いちにちけんしゅうかい)の目的(もくてき)は何だ
 ったのでしょうか。それは神の御言葉(ごごんご)と祭壇(さいだん)
 に奉仕(ほうし)することは、どれだけ大切な使命(しめい)か、
 イエス・キリストの共同体(きょうどうたい)が集う中(つど)で、いかに
 素晴らしい役割(やくわり)を共に(とも)に(司祭、リーダー、
 子どもたち)新たに確認(かくにん)するためでした。同
 時に、自分の信仰(しんこう)を養(やしな)うために感謝(かんしゃ)の祭儀(さいぎ)
 に積極的に参加(せっきょくてき)することが、どれだけ必要(ひつよう)
 なことであるかを考えるためでした。研修会(けんしゅうかい)に
 参加(か)した子どもたちは(13 名)こちらからの呼
 び掛け(よ)によく答えてくれて、すでに、主日(しゅじつ)の感
 謝(こうか)の祭儀(さいぎ)にその効果(あらわ)が現れてきているので
 はないかと思います。

子どもたちと一緒に再確認(いっしょ さいかくにん)したことを
 共同体(きょうどうたい)の皆さんと共に分かち合(あ)いたいと思
 います。そのため、豊津では10月16日(土)、
 行橋では10月17日(日)の「子どもと共にさ
 さげるミサ」(みことば さいだん)のなかで神の御言葉(ごごんご)と祭壇(さいだん)の
 奉仕者(ほうししゃ)の「任命式(にんめいしき)」を行う予定です。どうか
 皆さん、子どもたちのことを心(こ)に留(と)めて下さい。
 尚、ご両親(りょうしん)の皆さんの協力(きょうりょく)がなければ何も
 できませんのでどうか子どもたちの支え(ささ)となる
 ことを心(こ)からお願い(ねが)致します。

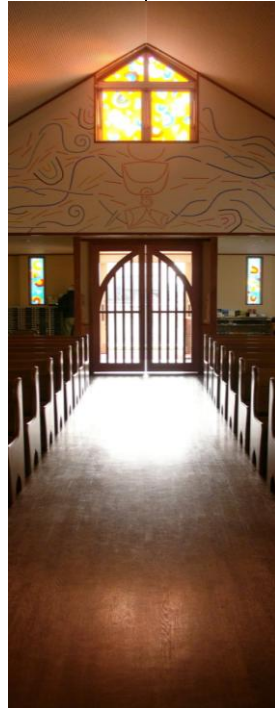


思いがけない訪問者 (2)

真夏(まなつ)の猛暑(もうしょ)の日曜日(にちようび)の朝、シャワーの
 冷たい水(つめ)を浴びてから、なつかしいメ
 ロディーを口(くち)ずさみながら髭(ひげ)を剃(そ)って
 いました。「お早(は)うございます。」外(そ)か
 ら嬉(うれ)しそう(こえ)な声(ひび)が響(はう)き、その方(ふ)へ振(む)
 向(ひら)きました。開(ひら)いていた風呂場(ふろば)の窓(まど)
 向(む)こうに、あの「人(ひと)」*が立(た)って手(て)を振(ふ)
 っていました。息(いき)を呑(の)み込(こ)み、一瞬(いつしゆん)た
 め(のち)らった後(げんかん)、まわ(まわ)り回(まわ)ってくだ
 さい。すぐ行(い)きます」とタオル(かお)で顔(ふ)を拭
 きながら歓迎(かんげい)の意(い)を表(あらわ)しました。実は、

私の感情は非常に複雑でした…。

「お待たせしました。お元気ですか」
 その「人」は私の挨拶に答えず、玄関から上がり、黙ったまま事務室を通って、私の書斎に入りました。机の上に並んでいたパイプをじっと見つめて、その一本を一勝手に！取り、たばこを詰めて吹かせ始めました。そして、「ね、どうしても多くの人が私についてほとんど何も知らないの？」といきなり言い出しました。誰のことを指して言っているのかわからず、どのように答えればいいのかと戸惑い、時間もなかったため、私は「ごめんなさい。今忙しくて議論する暇がありませんので、又新たに」と丁寧に話を逸らそうとしましたが「皆そうだ。いそがしい、いそがしいと言って逃げちゃう」とその「人」はつぶやきました。—「一つだけ教えて下さい。『いそがしい』をどのように書くか。『心』を亡ぼす』と書きます」と私は答えると、「へえ、なるほど…」しばらく沈黙が続きました…。感謝の祭儀の時間が近づき、信者たちがぼつぼつ教会にやってきました。その「人」の表情が次第に明るくなってきました。「せっかく私に会いに来てくれるので挨拶ぐらいしなくては」と言いながら、パイプを机にお



いて部屋を出ていきました。一どうも、その「人」と笑顔で挨拶を交わす人は少ない。「困ったな、きっと後で、また、いろいろとしつこく尋ねられるだろう」と気になりました。…感謝の祭儀が終わって部屋に戻るとやはり、その「人」は早速質問を浴びせかけてきました。「ね、どうしても私と挨拶を交わした人はなかったの」と。「だって誰もあなたを知らないですもの」。その言葉を口にした途端に「あつ、しまった」と思いましたが遅すぎました。私の当惑を見抜いたかのようにその「人」は話題を変えてくれました。…「ところで、今日の説教のことですが—

「今度は私の事か！」—私のことについてもっと分かりやすく話すことが出来ないかね。聞いている皆さんに本当に役に立つかな」…。

「痛い」。火のついたたばこの灰が手に落ちた瞬間に夢想から目が覚めました。…目をこすりながら机の上にあった原稿用紙にぼんやりした眼差しを滑らせた。「あら、うとうとしてしまっ、説教準備は全然進んでいないじゃないか」と自分を叱りながら、「かみ」(神？紙？)に向かって注意を注ぎ始めました。(続く)

* 6月号(No.36)・9月号(No.39)参照